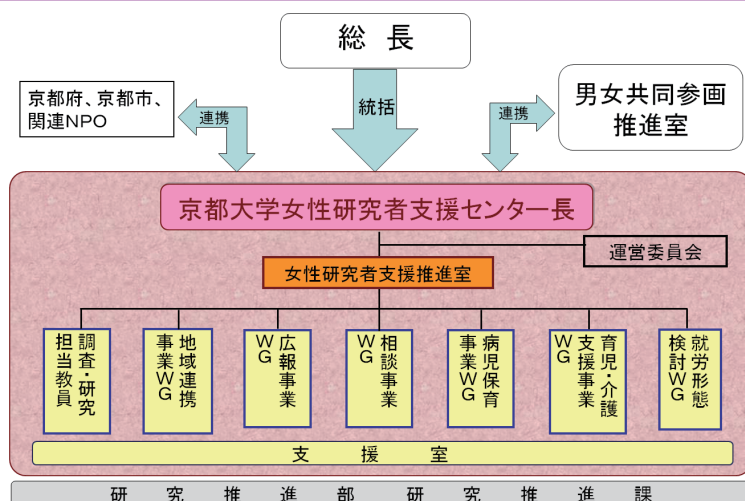




京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

女性研究者支援センターの組織が変わりました（4月1日より）

京都大学女性研究者支援センター組織図



女性研究者支援センターは昨年度末で科学技術振興調整費による委託が終わり、現在は学内経費で運営しております。学内での位置づけは、21年3月に、今後5年間の「京都大学男女共同参画推進アクション・プラン」が策定され、その中で、センターは、男女共同参画推進室と連携し、これまで実施してきた支援事業を可能な限り継続していく組織として位置付けられています。

資金面については、21年度は学内経費で、前年と同規模の予算が「京都大学重点事業アクションプラン 2006～2009」の中で確保されています。22年度以降も、第2期中期目標・中期計画の中に位置付けることで進行しています。

出前講義「からだを守る免疫の不思議」

4月23日（木） 京都府立洛北高校にて

京都大学女性研究者支援センター長
生命科学部教授

稲葉カヨ

昨年に引き続き、洛北高等学校スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 事業の対象となっている中高一貫コース (2学級) と普通科第Ⅱ類の高校1年生 (2学級) を前に、「からだを守る免疫の不思議」と題する講義に出向きました。この講義は、洛北SSHガイダンスの中に位置づけられていました。SSHとは文部科学省の事業で、理科・数学に重点をおいたカリキュラムで教育課程を編成し、且つ大学や研究機関と密接に連携して、講義や体験実習などを通じて独創的な能力を身につけ、主体的に研究を進めようとする人材を育成することを目的としたものです。洛北高校では、平成16年度にSSHとして3年間の指定を受け、平成19年度からは2期目の5年間のSSH事業を展開しており、現在で通算5年を経過し、今年は2期目のちょうどその真ん中です。

中高一貫コースの生徒は高校1年の化学を修了しているものの、生物の授業は受けておらず、第Ⅱ類の生徒は、中学理科の中での生物を履修したに過ぎないとのことでした。中学の生物を調べてみたところ、免疫に関係があるのは、循環系の作りと働きや血液循環、血液の成分、組織液といったところで、免疫は高等の教科書で初めて登場します。しかも、実際に免疫の内容が語られているのは、選択科目「生物Ⅱ」です。しかし、日常生活の中で、免疫はなくてはならない生体の防御機構であり、実際に免疫に関わる多くの疾患があることを理解してもらうことを目指して、話を進めることにしました。

最初に、「免疫」という言葉からどのようなことを想像するかと尋ねてみたところ、ウイルス、抗体、マクロファージ、ヘルパーT細胞、キラーT細胞などの言葉が出てきました。

ウイルスはインフルエンザを初めとして、非常に身近です。しかし、免疫応答の一翼を担う「抗体」の存在を知っているだけでなく、免疫応答が誘導される過程で働いている細胞についても知っていることには、少なからず驚きました。ワクチンの話をきっかけに、ワクチンが成立して感染症を防ぐことができるようになる過程を説明し、次いで、免疫応答によって作られた抗体が、花粉症を初めとするアレルギーでどのように働くのか、赤血球の輸血における血液型やAIDSにおける免疫不全について述べました。免疫応答は巧妙に制御されており、上手に働くとウイルスや細菌などから体を護ってくれるけれども、アレルギーで代表されるように亢進し過ぎてしまうと自己免疫病になったり、低下すると癌や感染症にもなることについても言及しました。

出席した生徒は女子がやや多く、彼女たちからは積極的に質問も出ました。3年後に、この中の何人かが、京大に入学してくれると嬉しい限りだと思いつつ、講義を終えました。

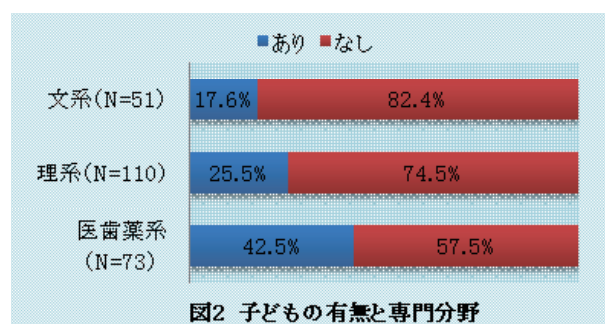
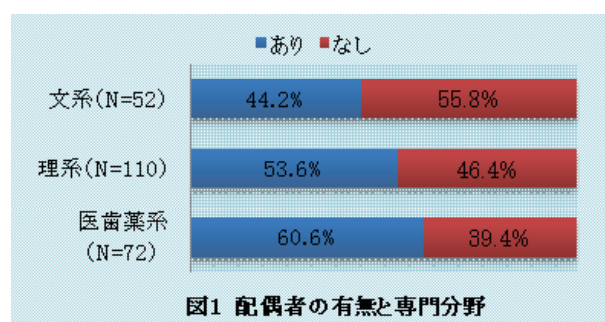


京都大学女性研究者就労形態調査報告

1. はじめに

本調査の目的は、京都大学に所属している女性研究者の研究・教育環境を結婚・出産・育児に焦点を当てて明らかにし、女性研究者にとってよりよいリサーチ・ライフ・バランスについて考察することにある。調査は京都大学と雇用関係のある女性研究者 545 名（教務職員を含む、2008 年 10 月 1 日現在）と日本学術振興会特別研究員（PD、RPD）54 名、合計 599 名（2008 年 11 月 1 日現在）を対象にして行われた。調査方法は web による質問紙調査、調査期間は 2008 年 11 月 15 日～12 月 20 日である。その結果、40.9%の回答が得られた（有効回答数 245 ケース）。とくに 30 代後半～40 代後半の回答率は高く、48.1%に達した。結婚・出産・育児を行う時期にあたる世代の関心の高さがうかがえよう。

2. 女性研究者の家族形成



最初に、女性研究者の家族形成について見てみることにしたい。配偶者、及び子どもを有する割合はいずれも医歯薬系、理系、文系の順で高いことがわかった（図1、2。有配偶率は医歯薬系 60.6%、理系で 53.6%、文系で 44.2%、子どもを有する率は医歯薬系 42.5%、理系 25.5%、文系 17.6%）。このような差異はどうして存在するのだろうか。40 歳未満の世代においては、本人が正規の常勤教員であると、また、配偶者が常勤雇用であると、子どもを有する者の割合が増えることがわかった。これはある意味当然のことといえるかもしれない。収入がなかったり、いつ無収入になるかわからない不安定な雇用であったりすると、子どもを産み、育てることはそれだけ難しくなるといえるからである。そして、パーマネントポストを得ている者の割合を見ると、40 歳未満の世代においては、医歯薬系、理系、文系の順に高いことがわかった（それぞれ 32.7%、26.3%、24.1%）。パーマネントポストを獲得することが困難な文系の若い研究者はそれゆえに出産を控えている者が多いといえよう。また、文系は常勤雇用の配偶者を有する割合がもっ

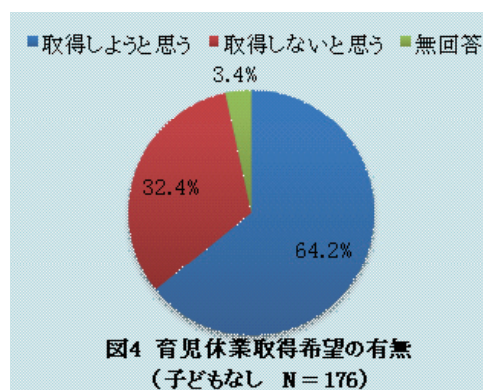
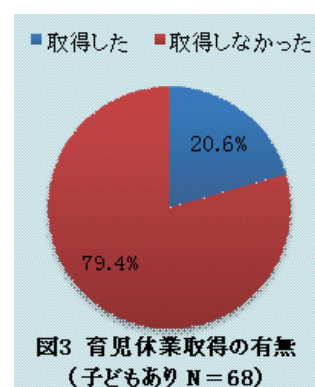
とも低く（常勤 60.9%）、医歯薬系はもっとも高い（常勤 81.4%）。理系は中間である（常勤 71.4%）。そして、文系の 69.6%が研究者を配偶者に持ち、理系は 54.2%、医歯薬系は 40.5%である。文系の配偶者も文系である割合が高いと思われるが、そう考えると、文系の若い世代は男女含めてパーマネントポストが得にくく、それゆえに出産を控える傾向にあるといえよう。ところが、40 歳以上の世代においては、逆に、文系、理系、医歯薬系の順で、パーマネントポストに就いている者の割合が高い。これは、文系よりも、医歯薬系、理系のほうが女性のパーマネントポスト獲得、継続、昇進が困難であったことを示している。そして、若い世代とはまったく逆に、この世代においては、本人が正規の常勤教員であるほど子どもを有する割合が低くなる。これは、研究者になるためには結婚、及び出産を断念せざるを得ない社会環境がこの世代において存在したことが要因として挙げられる。いうまでもなく、この世代には育児休業制度すら存在しなかった世代の者も存在する。

3. 女性研究者の現実と育児休業制度

今回の調査では子どもを有している者で育児休業を取得した者は 20.6%しか存在しなかった（図3）。ところが、子どもを有していない者のうち、今後子どもを産んで育児休業を取りたいと希望する者は 64.2%も存在した（図4）。つまり女性研究者は育児休業を取得したくても取得できない環境に置かれているといえる。

育児休業を取得しなかった者、及び今後取得したくないと回答した者にその理由を

尋ねてみると、仕事を中断したくなかった／したくないという理由が第一位に挙がってきた（それぞれ 33.3%、61.4%）。つまり、女性研究者においては完全に休業して研究を中断するより、子育てをしつつ研究を継続したいと望んでいる者が多いといえよう。そう考えると、育児休業は研究者の現実と合致していないといえる。といっても、配偶者はあてにならない。配偶者の育児休業取得の有無について調査したところ、取得したと回答した者はわずか 4.5%であった。



4. 女性研究者のよりよいリサーチ・ライフ・バランスのために

育児休業制度が研究者の現実に合致していないとするなら、いったいどのような育児休業制度が望ましいのだろうか。回答者に改善策を尋ねると、①完全に休業するより短時間勤務制度を充実させること（59.6%）、②育児休業中に公費を使った研究ができるようにすること（52.2%）、③育児休業取得期間の変更が複数回できるようにすること（44.1%）が望まれていた。すなわち、休業して仕事を中断するよりも、勤務時間を短縮することによって、あるいは休業中でも公費を使えるようにすることによって、少しずつでも仕事を継続したいと望む者が多数を占めるといえるのである。③は配偶者の育児休業取得のための促進策でも2番目に望まれていた（67.9%、1番目は周囲の理解促進〔82.1%〕）。したがって、夫婦が互いの仕事の都合に合わせて交互に短期間の育児休業を数回取ることが望まれていると推測される。望ましい育児サポートについて尋ねると、①学内保育所の設置（78.0%）、②周囲の理解の促進（64.1%）、③長時間保育制度の充実（62.9%）、④大学敷地内の保育所への入所優先制度の要請（58.0%）、⑤でようやく育児休業（51.4%）が選ばれていた。つまり、女性研究者のリサーチ・ライフ・バランスのためには、完全に研究を中断する育児休業よりも、保育施設の充実が望まれているといえるのである。ただ、⑤以下を見ると、正規の常勤教員とそれ以外では異なる傾向があることがわかった。正規の常勤教員では、パーマネントポストの増加が育児支援に結びつくとしており、それ以外では、長時間

勤務の見直しが育児支援に結びつくとしていた。また、専門分野ごとに同じく⑤以下を見ると、理系ではパーマネントポストの増加、文系では雑務の軽減、医歯薬系では長時間勤務の見直しが望まれていることがわかった。したがって、望まれている育児サポートは決して一枚岩ではないということもわかった。

今回の調査によると、女性研究者が育児を含めた生活を充実させつつ、研究を遂行するためには、すなわちよりよいリサーチ・ライフ・バランスを実現するためには、以下の四つの支援策が重要であることがわかった。

- ①短時間勤務制度を普及させる
- ②育児休業中でも公費を使った教育・研究活動ができるようにする
- ③育児休業取得期間の変更は複数回できるようにする
- ④京都大学女性研究者支援センターの待機乳児室を拡大し、かつフレキシブルなサービスが提供できるようにする

しかし、同時に、雇用形態によって、あるいは専門分野によって、あるいはまた世代によって、異なる支援策があり得ることもわかってきた。とりわけ若い世代のなかには、雇用も不安定であり、かつ、それゆえに家族形成もままならない者が一定程度層を成してきていることがわかった。若い世代のよりよいリサーチ・ライフ・バランスのためには、このような就職難を解決することこそ、急務であるといえよう。

女性研究者支援センター就労形態検討WG

文学研究科・特定助教 今田 絵里香

第1回「性差の科学」研究会

「脳・性・社会 Brain, Sex and Society」

パストゥール研究所 カトリーヌ・ヴィダル
(Dr. Catherine Vidal)

神経生理学者のカトリーヌ・ヴィダル先生の講演会を開催しました。最初に司会者である獨協大学名誉教授の井上たか子先生が、ヴィダル先生の研究に興味を持たれた経緯を話されました。「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」という有名なボーヴォワールの言葉があります。日本ではこの「女」がセックスの「女」として捉えられ、誤った批判がなされることもありました。これはジェンダーの「女」なのです。ヴィダル先生の研究はこの言葉の重要性に改めて気づかせてくれます。

ヴィダル先生によると、男女の脳の違いについて、これまでさまざまなことがいわれてきたそうです。例えば男の脳のほうが女の脳より重い、知的に優れているということです。しかしこれは身体の大きさを無視したものでした。また右脳と左脳をつなぐ脳梁が女のほうが太いため、女は両方の脳を使って一度に複数の異なる仕事ができるといわれてきました。しかしこれは測り方によって異なる結果が報告されています。また男女で高得点を取るテストが異なるといわれてきましたが、これも一概にそうとはいえません。図形のテストは、予め幾何

学のテストだと言うと男が高得点を取りますが、デッサンのテストだと言うとよくと男女の差がなくなります。さらに男が高得点を取るテストだと言うとよくとそのとおりになり、逆の申告をするとそのとおりになります。

このように男女の脳の差異はまだはっきりわかっていません。にもかかわらず、今なお人々をとりこにしています。しかし脳は一定ではありません。「可塑性」を有し、学習と体験によって変化するので。学生にお手玉の訓練をしてもらったところ、訓練後は大脳皮質の一部が広くなることがわかりました。しかし訓練を中止すると狭くなります。これは中高年でも同じ結果になりました。この結果は脳が学習によって変化することを示すと同時に、学習を中断すると再び元に戻ることを示します。こう考えると、男女の差異は脳の違いというより、学習と体験の違いにあるのではないかと思います。

講演は大盛況で、会場がほぼ満員になりました。

(今田 記)



連載：研究者になる！－第17回－

人間環境学研究科・教授

田邊 玲子



「研究」という言葉は、自分の営みを示す言葉として違和感がある。好きなことをがむしゃらに続けてきただけで、さまざまな偶然が重なりさまざまな選択を重ねてきた結果として現在があり、それが目的であったわけではない。果てしない学問の世界のなかで、自らの微少さを思い知らされながらいまなお「勉強」を続けている、そんな心持ちである。

専門はドイツ文学だが、子どもの頃からドイツ文学を読むのが好きで好きで、原語のドイツ語を学びたくて学びたくて、そうした文学を生んだドイツ（語圏）に行きたくたまらず、そもそもは外国語大学への進学を希望していた。けれど、外国語を学ぶのなら文学という学問を学びながらの方が楽しい、文学なら京大の文学部がどこよりも面白い、という、高校の国語教師の勧めや、京都なら下宿（憧れの一人暮らし！）させてやろう、という親の甘い言葉に乗せられて、京大文学部を受験した。入ってみると、圧倒的に男子が多いうえ、哲学にしろ歴史にしろ文学にしろ、みなそれぞれに「京大文学部」への思い入れが強い。そんな中に、わたしのようないい加減な人間が紛れ込んでしまったわけで、なんとも場違いな所に来てしまった、と、後悔したものである。

こんな風なので、「大学に残る」という選択肢など、全く念頭にはなかった。けれど、卒論を書いていて「文学研究」の面白さに目覚め、卒業後ドイツに留学してドイツの大学で学ぶうちに、ますます面白くなってやめられなくなり、帰国後、京大の大学院を受け直した。しかし、オープンで自由に意見を交わすドイツの大学の雰囲気とは正反対の鬱屈した雰囲気にもまず戸惑い、おまけに、数年ぶりの女子院生ということで、何かにつけて「女だから」「女なのに」と言われることにひどく戸惑った。おかげで「女」に目覚めることになってしまった。もしあの頃、「女性学」に出会わず、思いを同じにする仲間たちに出会わなかったならば、何かにつけて「女」を意識

させられる圧力に潰れていたかもしれない。ただ急いで付け加えておくが、学問的には男、女の別なく厳しく鍛えられ、感謝している。

思い返してみると、「よそ者」意識と「よそ者」を生む秩序への反発に駆り立てられてここまで来たように思う。そのためにとにかくがむしゃらに勉強した。それだけは自信がある。「文学をやる人間がドイツ語会話などという卑俗なことを学ぶな」と言われて反発し、ドイツの大学では「日本人は大人しい」「日本人は日本人同士群れる」などと言われて反発した。ドイツでは何よりも、自分は曲がりなりにも大学を卒業して留学したのに、ドイツ人の新入生に、読書のスピードや講義の理解や発言などが（当たり前だが）まったく太刀打ちできず、悔しくてたまらなかった。文字通り毎日泣きながら勉強し、昼間にゼミで言い損なったことを、夜、蒲団のなかで、ドイツ語でどう表現したものか、と繰り返し考えたりしたものである。京大の大学院時代も、やはり、女だからと馬鹿にされてなるものか、と、遮二無二勉強した。もちろんそれは苦しかったのだけれど、勉強すればするほど見えてくるものがある、そうするとまた新たな疑問が湧いて新しい視野が開けてくる。当然視されていたことを全く違う角度から見るができるようになる。このような、新しい発見と新たな疑問、新しい探索という連鎖の喜びがあり、その快楽を追い求めて今までやってきたと言っても過言ではない。

たしかに男社会の中の「女」として、妙なことにもし山出くわしたけれども、「女」であるために余分な苦勞をすることで得たものは多かったと思う。それを私は大切にしていきたいと思います、これから伸びゆく若い人たちにも、一見してマイナス要因に見えるものをプラスに転じてゆくような戦略をぜひ考えてほしいと思う。それと、良き仲間との出会いを大切に。



■ お知らせ 認知症について学んでみませんか

6月25日 15:00-17:00 女性研究者支援センターにて、京都市・認知症あんしんサポーター講座を開催します。

女性のための相談室 開室日

6月5日、6月12日、6月19日、6月26日

7月3日、7月10日、7月17日、7月24日、7月31日

Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>